

平成 17 年度拠点内研究教育留学

理学研究科化学専攻では、「新規物質創製変換研究領域」の事業推進担当者の研究室を中心に、4 回生学生の拠点内研究教育留学を行っている。これは学生の幅広い研究能力の育成を目指して以前からの検討事項であったが平成 17 年度に実現したものである。現時点では同じ理学研究科化学専攻に所属する一部の研究室間での留学であるが、今後は他研究科や他研究領域への拡張も視点に入れている。以下に具体的な留学の方法とその目的・効能について簡単に解説する。

◎研究留学の規則、対象学生、留学時期など

- 1) 4 回生前期にある分科に所属する学生が大学院修士課程入学試験に合格し、大学院修士課程においても同じ分科に進学することが決まっているとき、その学生は 4 回生後期には他の分科で研究を行う。
 - 2) 大学院修士課程から他の分科（または他の大学院、研究科など）に移動することになっている学生は 4 回生後期も移動しない。
 - 3) 大学院修士課程に進学するとき、必ず予定どおりの元の分科に戻る。
 - 4) 4 回生は後期に所属する分科における研究成果を卒論として提出する。
 - 5) 4 回生後期の移動によりある分科から出る学生と入る学生はその数を同じとする。
 - 6) どの分科に移動するかは、移動する学生が話し合いで決める。
- ※ 2005 年度は「有機化学」、「有機合成化学」、「集合有機分子機能」、「生物化学」の 4 分科間において行っており、9 名が研究教育留学中である。

◎研究留学の目的・効能

従来よくある（優秀な）学生と研究室の関係は、4 回生から博士後期課程修了まで同じ研究室で、同じ研究指導者の下、同じ研究テーマを続けること、である。一つの研究テーマを極めることも重要であるが、若い時期に一つの研究テーマだけでなく他の研究分野をも身をもって体験することは、将来の研究の発展にポジティブな影響を与えるものと期待される。

- 1) 複数の研究室の研究に直接触れることにより、研究に関する様々な考え方、研究目的、方法論などを学ぶことができる。
- 2) 複数の指導者に接することにより、人脈が広がる。
- 3) 複数の研究室の機器が操作できるようになる。